

アメリカ合同教会の「会衆主義」 ——人権や環境問題へのアプローチ——

バークレー太平洋神学校名誉教授・アメリカ合同教会引退牧師

ランディ ウォーカー

Randi Walker, Ph.D

通訳 齊藤国際知財事務所代表 アメリカ弁護士

齊 藤 尚 男

講師紹介 Randi Walker, Ph.D.

バークレー太平洋神学校 (Pacific School of Religion) 名誉教授、アメリカ合同教会引退牧師。ニューメキシコ大学卒業後、クレアモント神学校 (M.Div.), クレアモント大学院 (Ph.D.)。1983～1992 年南カリフォルニアにあるアメリカ合同教会で牧師、1992～2018 年バークレー太平洋神学校教授及び神学大学院連合 (The Graduate Theological Union) 博士課程教授としてアメリカ・キリスト教史、環太平洋地域とアメリカ合同教会の歴史などを教授。現在ニューメキシコ州アルバカーキ在住。

1 最初に

このような講演会にお招きいただき、大変光栄に存じます。この講義は、世界の会衆派教会と、今日アメリカ合同教会の一部である会衆主義教会を紹介するものです。このトピックを語るためには、17 世紀から 18 世紀にかけて、北米のイギリス植民地にお

ける教会の発展のみでなく、新約聖書の時代、そして宗教改革から考えていかななくてはなりません。その歴史は、アメリカ合衆国建国時に、教会と国家を分離し、教会が自分たちの問題を管理するための独自の規則を自由に策定できるようになるにつれて、より複雑なものになっていきました。今日のアメリカ合同教会において、その重要な一部分として会衆派教会を中に抱えていることは、その合同教会の教会論形成に大きな影響を及ぼしています。アメリカ合同教会の教憲は会衆に、自分たちの事柄を管理し、自分たちの信条を決定し、自分たちの牧師を招聘する自治を与えましたが、アメリカ合同教会の契約的教会論は、この会衆の権利と時として緊張関係に置かれることがあります。これは、アメリカ合同教会が今日、社会におけるより大きな社会問題に取り組む際に、大きな影響を及ぼしています。今回はこれらの問題を概説しますが、すべてを深く議論することはできないため、さらに探求するための参考文献を資料の最後につけておきます。

2 会衆・会衆主義・会衆派教会

まず congregational（小文字の c を使用）と Congregational（大文字の C を使用）の定義付けをしておきましょう。新約聖書の観点から、「教会とは何か」について考えてみると、多種多様なキリスト教共同体が「congregations」「会衆」として独立し、発生しました。ヨーロッパにおいては、宗教改革以前までに、この独立性は消滅し、ローマ・カトリック教会において教皇権を中心と

した中央集権的な教会制度が成立していました。

宗教改革において「congregational」「会衆」という概念は様々な教会、特にバプテスト教会、クエーカー、ユニテリアン・ユニバーサリスト教会、そして英国のピューリタン（改革派）によって設立された他の教会に出現しました。彼らの多くは北アメリカに移住し、英国国教会とは別の教会・教派を設立しました。彼らは、互いに協力しながらも、自治・自立しながら会衆主義を発展させました。1870 年代後半から 20 世紀になるまで、「Congregational Church」会衆派教会または会衆主義教会というより正確な名前の教派が存在するようになりました。米国においてこの教派は、会衆派教会総評議会（General Council of Congregational Churches）と呼ばれる組織として存在していました。会衆派は、新約聖書においてパウロが述べているような教会の独立性をロールモデルとしました。総評議会はエルサレム公会議のように、共通の関心事について話し合うための会合の場でしたが、各会衆を統治する機関として存在したわけではありません。1930 年代、会衆派教会総評議会は、クリスチャン教会（Christian Churches）、アフリカ系アメリカ人キリスト教会同盟などを巻き込んでいきました。それらの教会は、教会論、教会政治体系として「会衆主義」的でした。この合同された教派は、会衆派キリスト教会総評議会（the General Council of Congregational Christian Churches）と名乗りました。この総評議会は、20 年後にアメリカ合同教会に参加していきませんが、アメリカ合同教会合同の際には、そこからの離脱教会が多く生み出されました。多くの会衆派

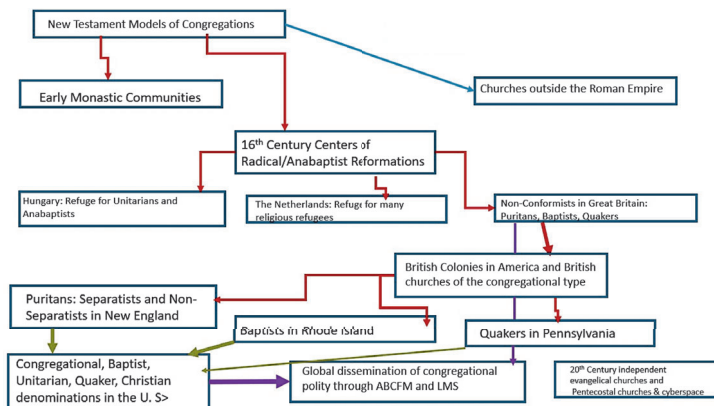
は、総評議会のエキュメニカルな理想と一致せず、独自の道を歩みました。全米会衆派キリスト教会評議会（The National Council of Congregational Christian Churches）は、会衆主義の教会で、後にアメリカ合同教会に加入しなかったグループです。またより神学的に保守的なグループは、アメリカ合同教会が共産主義者に同調していると懸念を抱き、保守的な会衆派キリスト教会を結成しました。また多くの会衆派は、アメリカ合同教会に参加するか、他のグループに参加するかをその時点で決めていませんでした。彼らはその後完全に独立して、会衆派という名前を今日まで名乗っています。重要なことに会衆派を基盤とする宣教団体、ABCFM（アメリカ外国宣教委員会）、AHMS（アメリカ家庭宣教師協会）、および AMA（南北戦争後にアフリカ系アメリカ人の学校や大学を設立した団体・アメリカ宣教協会）など南部の教会は、アメリカ合同教会設立時に総評議会に残りました。

3 会衆派教会の系図

会衆派教会の系図は図のとおりです。

新約聖書における教会のイメージは、キリスト教が広まるにつれて、さまざまな会衆（congregational）の発展に影響を与えました。それぞれの場所で、キリスト教徒の会衆が集まり、その指導者を選び、時には使徒パウロのような巡回指導者の指導の下に、時には自分たちで集まったのです。指導者には、司教、長老、執事、未亡人、使徒など、さまざまな肩書きがありました。かなり

図 Family Tree of Congregational Types of Churches



後になるまで、一貫性はほとんどなかったようです。カトリック教会と正教会で発展した司教制に、ローマ帝国以外の教会はほとんど従いませんでした。司教区は、教会がローマ帝国の統治体制の政治的部門として存在することを意味しました。アフリカ、インド、ペルシャ、および中央アジアのローマ領外の教会は、それぞれの地方の慣習に従いました。西洋の教会内でさえ、修道会にはるかに会衆的に運営され、修道士のグループを地元で組織し、ベネディクト会規則またはその他の教憲に従って独自の指導者を選出していました。

今日私たちが会衆主義として知っているものは、急進的なアナバプティストの宗教改革者たちに端を発しています。これらは主に改革派や福音ルター派などとは異なり、国教会の考えを拒否したものでした。彼らは、ローマ・カトリック、ルーテル派、改革

派など、ほぼすべての人から迫害を受け、その結果、小さな集団として、オランダやハンガリーのような地域で難民共同体として存続していきました。イギリスの過激な再洗礼派のプロテスタントは、アメリカ大陸の英国の植民地に移住しました。私たちが会衆派と考える教会を構成しているのは、ピルグリムとピューリタンと呼ばれるこれらのグループです。他のグループ、特にバプテストとクエーカーも、彼らの教会を会衆主義として組織しました。会衆による教会組織の方法は、イギリスの会衆派の宣教師（ロンドン宣教協会とアメリカの外国宣教委員会）の活動によって世界的に広まりました。

新しいキリスト教徒の団体や、ペンテコステ派教会、福音派の「メガチャーチ」やサイバースペースで集まる様々な現代の新しいグループも会衆主義的な組織として特徴づけられるでしょう。

4 米国における会衆主義

米国では、教会を組織する会衆派のスタイルが国の創りにも大きな影響を与えるようになりました。ピューリタンとその会衆派教会は、米国の建国神話において重要な役割を果たしています。巡礼者（The Pilgrims）のメイフラワー契約は、彼らの船が間違った場所に着陸したときにどのように自分たちを統治するかについて、共同体としての決定を表しており、彼らの新天地での生活は英国の権威の下から離れたものでした。メイフラワー契約、教会と新天地での行政に関して、コミュニティ全体の手で意思決定を

委ねました。

米国の主要な祝日である感謝祭は、巡礼者の成功を祝うものです。巡礼者がどのようにして先住民の人々と友達になったのか、彼らがどのように病気を乗り越え、最初の成功した収穫に感謝するために祝宴を開き、先住民の人々を招待した等の、有名な話の数々は完全に史実である、とは言えません。彼らが北米の海岸に上陸したとき、彼らは困難な状況にありました。冬が始まったばかりで、春まで生き残るための食べ物ほとんどありませんでした。先住民のワンパノアグの人々が彼らに同情しなければ、彼らは全員死んでいたかもしれません。巡礼者はワンパノアグが病気のために放棄した場所に定住したため、ほとんど病気になり、冬の間亡くなりました。生き残った少数の人々は作物を植え、収穫を祝いました。

巡礼者たちの政治観、教会論は、数世代後に制定されるアメリカ合衆国憲法に影響を与えました。19世紀、会衆派教会に代表される会衆主義は、アメリカ人にとって重要なキャラクターと言えます。アメリカのアイデンティティーである独立性、個人主義、地方の決定権は、会衆主義に由来します。市民は、自分の好きなように自由に行動でき、自分の成功または失敗の責任は自分に転嫁されると考える社会です。この独立した個人主義は、より高い教会の権威からの会衆の独立と同様に、優れた創造性と革新を可能にしますが、同時に人々を互いに孤立させ、強力な人のつながり、共同体形成を阻害してしまいます。独立した個は、人生での孤立も招きかねませんし、生活圏が非常に狭い状態になります。

これは、会衆派教会が社会正義に、どう関わるかを検討するうえで、重要な要素となります。米国の地域社会は、地域の問題に対処する上で非常に創造的で機知に富んでいる場合があります。しかし問題がローカルではなく、地域的またはグローバルである場合、ローカルレベルで問題に対処することは不可能になり、その独立性は、問題を解決するために必要な協力に反する働きとなってしまいます。

会衆派教会は、典型的なアメリカの教会と言えるでしょう。19世紀に、彼らが祝った祝日には、感謝祭、7月4日独立記念日、メモリアルデー（特に戦争で亡くなった人々を称える日）が含まれていました。クリスマスが日曜日に当たらない限り、ほとんどの会衆派教会は19世紀後半までクリスマスにほとんど注意を払いませんでしたし、彼らは足洗木曜日（最後の晩餐、キリストが弟子たちの足を洗った日）を、受洗者限定の礼拝として守り、次の日曜日に復活についての説教をしました。しかしイースターを特に祝ったわけではありませんでした。クリスマスとイースターは、アメリカでそれらが商業主義に乗り、大型連休となった頃から会衆派教会は、それに乗って祝うようになっただけのことです。

20世紀初頭の第一次世界大戦以来、星条旗を掲げない会衆派教会を見つけることは難しくなり、愛国的でもありました。こういう理由で典型的なアメリカの教会であったと言えるのです。

5 アメリカ合同教会に属する会衆派教会

ここではアメリカ合同教会のルーツとして3つご紹介いたします。

20世紀になると、エキュメニカル（教会一致運動）な熱意の波が会衆派教会に影響を与え始めました。会衆派教会のほとんどは、会衆派教会総評議会として知られる緩い組織の一部でありましたが、その構造は教派的特徴を持ち始めていました。これが1つ目です。

さらにエキュメニカルな活動に参加し始め、異なる教派との合同について議論を始めた会衆派の教会も存在しました。16世紀の急進的改革者のように、新約聖書の原則に基づいた教会形成に戻りたいと考えた彼らは、メソジストや会衆派などの非聖書的な名称ではなく、自分たちのことを「クリスチャン」と呼びたいと考えた人々です。彼らは古典的な信条が分裂的で役に立たないと思いました。総クリスチャン同盟（The General Christian Convention）はこういったキリスト教徒の集合体で、これが2つ目です。そしてアフリカ系キリスト教会（The Afro-Christian Convention）は、アフリカ系アメリカ人コミュニティの間に組織された教会です。彼らは当初、白人のキリスト教会に歓迎されていませんでした。彼らは解放奴隷のための学校や大学を建設した会衆派アメリカ宣教師協会と共同で組織されたアフリカ系会衆派教会もありました。これが3つ目です。

20世紀初頭を通じて、このエキュメニカルな熱意は、1930年

代にこれら 3 つのグループの連合につながり、会衆派キリスト教会総評議會を形成しました。すぐにこの新しい会衆派は、別の新しい合同教会（福音ルター派と改革派）と合同について協議し始めました。2 つのグループは 1957 年にアメリカ合同教会を形成するために統合されましたが、これは会衆派と長老派の 2 つの非常に異なる教会論を持つ教派同士の合同となったのです。

福音ルター派と改革派の代表者会議は、アメリカ合同教会に加わることを教派として決定しました。しかし会衆派教会は、各会衆、各教会ごとの投票をもって、合同教会に加わるかの決定をしました。その結果、すべての会衆派教会がアメリカ合同教会に参加したわけではありません。いくつかの教会は、独立したままで、単立教会となりました。より保守的な神学を持ち、特にエキュメニカルな活動に懐疑的な、保守会衆派教会を形成した人もいました。またいくつかの会衆派教会は、合同教会参加について、議論すらしませんでした。

しかし会衆派教会の存在は、アメリカ合同教会の教会論に大きな影響を与えました。次に、その問題を検討します。

6 アメリカ合同教会の略歴

1957 年に 4 つの教派が合同し、アメリカ合同教会が設立されました。これらの教会のいくつかは、これより約 20 年前にすでに合同しており、20 世紀のより大きなエキュメニカル運動に触発され、エキュメニカルな実験を続けていました。この講義のほとん

どは会衆派教会についてですので、まずに福音ルター派と改革派の教会について説明します。

福音改革派教会は、1930 年代に、米国のドイツ移民コミュニティに根ざした 2つの教派の合同によって形成されました。これらの中で最も古いのはドイツ改革派教会でした（その名前は第一次世界大戦中に米国改革派教会に変わりました）。ドイツ改革派の人々は、17 世紀にペンシルベニアの英国植民地に移住しました。もう一つは 1840 年代にプロイセンからミシシッピ溪谷に移住した人々で構成された北米福音教会会議（the Evangelical Synod of North America）でした。彼らは、1817 年にプロイセンのルター派・福音派教会と改革派教会を統合した初期の統一教会であるプロイセン連合教会の出身でした。後に「**Evangelische Kirche der Union**」（**Evangelical Church of the Union - ECU**）と呼ばれるようになり、ベルリンの壁崩壊後、東西ドイツの教会が再会したとき、**UEK（Union of Evangelical Churches）**となりました。福音主義の教区の人々は、アメリカ合同教会の形成につながった連合体で主導権を握りました。彼らはすでに合同した教会であり、ドイツのルター派・福音主義教会の司教的政治体制とドイツの改革派教会の長老的政治体制を結びつけるという緊張を経験していました。合衆国では、教会が広範囲に設立され、散らばっていたため、長老制がうまく機能しませんでした。そのため、彼らは各会衆で物事を決定する方式を採用していましたが、各個教会が自治・独立する会衆主義の教会論を採用することはありませんでした。

米国の改革派教会その教会論と政治体制は、長老派教会に非常によく似ていました。この教会学では、長老会は叙階する権威の場所であり、教会同士の交わりを維持する役割を果たしていました。総会は教会全体を統治し、教会の中心的な教えについて決定を下しました。

福音ルター派と改革派の教会は、まず合同し、合同後に、その教会論、政治体制の細部を決定することとしました。彼らが会衆派教会と、合同についての会話を弾ませた時、彼らは教憲を形成するプロセスをまだ終えていなかったもので、福音改革派教会が独自の結合プロセスを終えていたら、どのような教会論や政治体制を持っていたのかを完全に知ることは不可能です。福音改革派教会にとって、合同教会を形成するということは、教会論よりもキリストの教えに従い、祈りの中で行うことが優先されたのです。彼らは聖霊の働きが、その合同過程において、教会を導くことを信じていました。総会でアメリカ合同教会への参加について、投票がなされた時、福音改革派教会に属するすべての教会がアメリカ合同教会に参加しました。

一方で会衆派クリスチャン教会は、明確な教会論と教会政治についての自己理解を持っており、合同の過程でそれらを変えるつもりはありませんでした。会衆派教会とクリスチャン教会（アフリカ系キリスト教会とクリスチャン教会連合）は、会衆制の長い伝統を共有してきました。彼らの教会論は、主に宗教改革の急進派または再洗礼派に由来し、各個教会の会衆としての国家教会から分離し、その政治において必然的に会衆主義的であり、新約聖

書に由来する古代教会の教会論に傾倒していました。それぞれの教会の事はそれぞれの教会が決めるのです。英国国教会から正式に分離しなかった非分離派の清教徒たちは、アメリカにおける植民地が国教会とは異なる考え方をする人々の避難所になりえることに気づきました。18世紀までに、彼らの一部は、より長老的な形式の会衆主義を発展させました。これはコネチカット州で最もはっきりと現れており、コネチカット川流域では、ほとんどの場所で単なる諮問機関であり、教会の人々の間で共同体を育成するだけの会衆連合が、教会の牧師の選択を承認または不承認にしたり、会衆の信念に異議を唱えたりする権限を持っていました。しかし、長老制とは異なり、会衆連合は会衆が異議を唱えるのを実際に阻止することはできませんでした。

クリスチャン教会は、アナバプティストのルーツを持つバプティストの伝統に根ざし、アナバプティストの伝統全体の会衆主義に参加しました。さらに、クリスチャン連合には、ソシニアン派の急進的宗教改革とセルベトゥスの信奉者の伝統に基づいて、ユニテリアン神学の会衆がいくつかありました。新約聖書に深く根ざした彼らの神学は、伝統的な信条と対立していました。なぜなら、三位一体などの信条の概念は、信条によって提唱された哲学的な形で新約聖書には見られなかったからです。「キリスト以外に信条はない」が彼らの原則でした。アナバプティストのように、急進派が国教会に異議を唱えたのは必然的に会衆的でした。

同様に、自由なアフリカ系アメリカ人の散らばったコミュニティの間で、または時には奴隷のコミュニティの間で形成された

アフリカ系キリスト教会も、必然的に会衆主義的であり、周囲の白人クリスチャンよりも自分たちの問題に対する権限がはるかに小さく、実際的なものではありませんでした。

合同に向けた協議は 1940 年代から 1960 年代初頭まで 10 年近く続きましたが、1957 年の夏に合同総会が開催されました。第二次世界大戦中は協議が一部中断しました。また一部の会衆派教会は、合同に反対し、世俗の裁判所で訴訟を起こすことで、協議そのものを停止させようともしました。彼らは主に、ABCFM（アメリカ外国宣教委員会）、アメリカ家庭宣教師協会、アメリカ宣教師協会の多額の寄付基金が会衆派教会から離れることを憂慮していました。裁判は最高裁判所の判断にまで及びましたが、結果としてそのような教会の問題を決定する権利がないとしました。結局会衆派キリスト教会の各会衆は、それぞれの教会でアメリカ合同教会に参加するかどうかの投票をしなければなりませんでした。そのほとんどが参加しましたが、いくつかは参加しませんでした（特にいくつかの大規模な教会は寄付基金の問題よりもアメリカ合同教会が共産主義組織であるかどうかを憂慮していました）。今日に至るまで、その表決をしていない会衆派教会も存在します。

アメリカ合同教会の教会論は「あいまいな教会論」(an ambiguous ecclesiology) であると言えるでしょう。なぜそのような教会論であるのかは、このような合同の歴史にあります。ある意味では、アメリカ合同教会は宗教改革の伝統全体（英国国教会とカトリックの宗教改革を除く）を 1 つの教派としてまとめよ

うとしています。アメリカ合同教会のモットーは、ヨハネの福音書から引用されています。ヨハネによる福音書 17 章 11 節「わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。」(新共同訳)

その「あいまいな教会論」は新約聖書が示す初期の教会の在り方に従う中で、生じました。その特長を 3 つ挙げておきます。

1 つ目は、神によって集められたそれぞれの会衆・教会は、他の教会を知っていて、時にはお互いをサポートし、お互いにもてなし、また互いに祈り合っていました。

2 つ目はパウロやベテロのような巡回伝道者によって教会が建てられていきました。

そして 3 つ目は、個々の会衆がエルサレム評議会などの指導者の評議会において、すべての教会をまとめ、彼らの間で生じた問題を決定しました。改革派 / 長老派の政治体制では、教会はすべての会衆で構成されており、長老会または教区の役割は、エルサレムの評議会の役割と同様に、教会全体の統一を見守ることです。それに対してピューリタン、会衆主義は、そして非公式の福音派教会会議の教会論では、各会衆に自己決定をいたします。他の会衆と共同体を形成することは可能であり、彼らは互いに助言し合い、多くのことで協力しますが、それぞれの会衆が何を信じ、何をすべきかを決定する権限を持つ上位機関はありません。アメリカ合同教会に加わった多くの教会の伝統は、宗教改革者カルヴァンと同じように長老制でした。しかしそれは司教が大地主であり権力も持っていた中世ヨーロッパの司教とは違います。カルヴァンにとって、一人の個人よりも、司教評議会の手に教会を委

ねる方がはるかに快適でした。この中で、彼は 15 世紀以来のローマ・カトリック教会内の共通の呼びかけに従い、司教評議会に集まり、教会を改革しました。

アメリカ合同教会では、各教会の自由と、アメリカ合同教会内の各団体がその環境において教会である自由を持つことを高く評価しています。合同教会の契約的教会論は、各会衆がより大きな教会の一部であることに対しても責任を持つことを奨励しています。アメリカ合同教会はこの契約共同体を強制するものではありませんが、それはキリストの体の一部であるという霊的な繋がりのことです。

7 アメリカ合同教会の教会論に対する会衆派教会の影響

アメリカ合同教会の形成は、会衆派教会の自治・自立の精神が保障されていない限り、なしえなかったと言えるでしょう。これがアメリカ合同教会憲章に書かれたことで、会衆派教会のほとんどは、このエキュメニカルな新しい教会の一員であることを喜んでいました。神学的には、彼らは福音派および改革派教会と多くを共有しており、両教会は社会的福音の遺産に基づいた社会正義の活動に従事していました。それぞれの会衆の独立性が保証されているため、アメリカ合同教会は各個教会を緩やかにまとめています。会衆派教会は、教会員の表決によって教派を離れることはとても簡単です。一部の教派の執行部は、お金を必要とする会衆

に対して非公式の権力を持っていましたが、この権力は十分に規制されていませんでした。その独立性にもかかわらず、会衆派教会のメンバーは、アメリカ家庭宣教協会に根ざした会議に巨大な非公式の力を与えました。教育長は、小さな、新しい、または苦勞している会衆が牧師を維持したり、建物を建設したり、他のプロジェクトを実施したりするのを支援するために提供する資金を持っていました。彼らはまた、特定の会衆の牧師に誰が適切に召されるかについて、ある程度の発言権を持っていました。たとえば、1880年代にカンザス州の会衆が女性を牧師に任命しましたが、教育長はこれが適切であるとは考えておらず、会衆が牧師に任命した場合に牧師の給料を支払うことや支援することを拒否しました。彼女は、教会の将来を危険にさらすよりも、叙階の夢をあきらめました。この公式の会衆の自治は、会議監督者が行使する非公式の権限とは対照的です。

時には、福音ルター派と改革派の会衆は、長老派の政治体制の中で、会衆派の彼らが望むように物事を行う自由を実際に持っていました。長老制の統治制度により、一人の個人が会衆を支配することはできませんでした。

アメリカ合同教会において、会衆の自由と教派としての責任というジレンマに対する神学的な解決策は、契約の概念にあります。これは、神が会衆を選び、共に召し出し、そして神の民として会衆が共に定められた方法に従うことを神と契約する、という聖書的理解から導き出されたものです。アメリカ合同教会では、会衆

が一緒になって合同教会を形成するために神から召されていると認識しています。会衆は神との間だけでなく、互いに契約を交わし、神の道を歩むのです。したがって、個々の会衆が決定することは、他のすべての会衆に影響を与えることになります。契約の範囲内で言えば、その地区の信徒は、自分たちの意向だけでなく、互いに配慮し合うことを約束しています。同じように、地区は、より大きな範囲で教区を形成し、ひとつの教会だけではできない社会正義のための活動や宣教の業を実践することができるようになるのです。全国的には、教区もそのような契約のもとに結ばれています。アメリカ合同教会は、この契約のもとに、世界規模での宣教の業を行ったり、全国レベルでの社会正義のための活動に従事したりすることができるのです。ある意味、この契約は自発的なもので、それは、神や他の教会との関係において、信徒全員が実践する一種の霊的修練だと言えるでしょう。アメリカ合同教会には、設立以来、いくつかの教憲があります。新しい教憲ができるたびに、教会は契約の概念の理想形に近づこうとしているのです。時が経つにつれて、合同教会の方向性に違和感を覚えた教会の中には、その繋がりを断ち切るか、あるいは次第に離れていってしまった教会もあります。アメリカ合同教会には、ある教会が留まることを望まなければ、その教会を引き止める手立てはありません。合同教会のあり方についての論争や対立は、設立当初に比べれば少なくなりました。この契約的でありながら会衆的な教会政治の形態は、アメリカ合同教会が社会正義の問題に取り組む上で、いくつかの影響を及ぼしています。次節でこの点につ

いて検討したいと思います。

8 会衆主義の教会政治形態は、教会における社会正義の実現のための活動にどのような影響を及ぼすのか

会衆主義の教会政治形態は、社会正義のための活動について言えば、賜物と課題の両面があります。正義を求めよという聖書の勧告には多くの側面があるため、それらが特定の状況にどのように適用されるべきかについて、教会はそれぞれ違う意見を持つこともあります。また、人間は長い間、自分たちの安寧と豊かさを脅かすものであれば、他者のための社会正義の実現には目をつぶってきた歴史があります。会衆主義の政治形態は、各個教会がその地域で直面する問題に、最も適した方法で、社会正義のための活動を自由に行うことを可能にします。それはまた、教団などの包括団体が、各個教会にある社会問題に対して行動を起こすことを求めた時に、もし各個教会が違和感を覚えた場合には、そのような活動に参加しないことをも許容するものです。最良の会衆主義の教会政治形態は、会衆が正義の問題に迅速かつクリエイティブに対応することを可能にします。例えば、数年前、アメリカのモンタナ州のある会衆派教会は、地元のユダヤ系住民がハヌカの燭台であるメノーラーを窓に飾ると、住居が荒らされてしまうという問題に直面していることを知りました。そこで、その会衆派教会の人々は大勢の地域住民に呼びかけて、ユダヤ系住民と連帯するために、皆で窓にメノーラーを飾ることにしたのです。

この連帯の行いは破壊行為をやめさせ、ユダヤ系住民を支え、宗教間の結びつきを強めることにつながったのです。彼らは地元の人々の知恵を頼りにし、このような問題に個人が単独で対処するのは危険だと感じる状況において、コミュニティの力を引き出したのです。

一方、会衆主義の教会政治形態では、教団全体が何かをすることを決定するには、時間がかかり、労苦を伴います。なぜなら、社会正義の推進がその教団において規範となるためには、広く合意が得られなければならないからです。アメリカの文脈では、女性の按手がひとつの事例として挙げられます。ニューヨークのある会衆派教会は、地区組織が同意しなくても独自に行動できるとして、1853年には早くも女性に按手礼を授けました。しかし、その女性牧師であるアントワネット・ブラウン (Antoinette Brown) は、より大きな会衆派コミュニティの中では認められず、教会は孤立してしまいました。女性の按手が会衆派教会に広まっていくには、さらに 100 年の歳月を要しました。同様に、19 世紀に多くの会衆派教会が奴隷制廃止運動に参加したにもかかわらず、全ての教会が同意したわけではないので、教派全体としてこの問題についての方針を定めることができなかった、という事例もあります。20 世紀には、1930 年代から 1940 年代にかけて、アメリカ連邦教会協議会などのエキュメニカルな団体が人種的正義のために重要な活動を行いました。これは、1960 年代の公民権運動が目覚ましい成果をあげるよりもずっと前のことです。人種的公正を追求する会衆派の各教会は、全ての教会の同意が得られないために教

派全体として人種問題に明確な態度を表明できなかった時、連邦教会協議会に参加することで社会正義のための行動を取ることができました。しかし、連邦教会協議会でさえも、全会一致の支持を得られないために、手を引かざるを得ない事例もあったことは事実です。アメリカ合同教会の契約の概念に基づく教会政治形態では、教会総会、地区、教区、そして教団総会というそれぞれの階層において、教会が社会正義のための活動を行うか否かについての自由がより多く与えられています。しかも、契約は自発的な実践によるものであるため、これらのいかなる階層においても、全ての教会に特定の行動を取ることを一律に強制することはできません。例えば、教団総会は、信徒に対して意見を述べることはできても、信徒を代弁することはできません。例えば、同性婚を支持する宣言をしたことで、アメリカ合同教会はそのオープンな姿勢で知られるようになりました。しかし、信徒籍を置く教会を探しているゲイカップルが、アメリカ合同教会に所属する教会であつても全く彼らの結婚する権利を支持しない教会に出くわすこともあるのです。アメリカ合同教会全体としてはかなり進歩的に見えるかもしれませんが、ひとつの問題に対処しながら教会全体が共に成熟していくには何世代もかかるのです。

ドイツの福音合同教会 (Evangelische Kirche der Union, EKU) の神学者ラインハルト・グロスカース (Reinhart Groscurth) は、『エキュメニカル・レビュー』 (Ecumenical Review) の記事の中で、すべての合同教会がこの問題に直面していると指摘しています。合同教会は、教会の一致を求めるならば、ある種の教理的な

明確さと均一的な実践はあきらめなければならないのです。これは、教理と実践が重要でないということではありません。しかし、教会の一致をまず求めるということは、教会同士が時には深い意見の相違を越えて、クリスチャンとしての召命をより明確に理解するための時間を必要としています。

9 人権と環境についてアメリカ合同教会が行ってきたこと

アメリカ合同教会は、
合同を遂げた後も社会
正義の実現のための活
動を粘り強く続けてい
ます。教会の人権問題
に関する活動としては、
人種問題、労働者の権



利、女性の権利、LGBTQ の権利、障がい者の権利、という5つの分野に重点を置いて活動しています。例えば人種関連の活動では、アメリカ合同教会は、ラジオ、テレビ、インターネットなどのメディアをすべての人が利用できるようにすることに焦点を当てた、アメリカでも最も影響力のある人権擁護団体のひとつを築きました。最近では、メキシコの教会と協力して、アメリカ・メキシコ間の国境にいる人々に奉仕活動を行うと共に、大変な窮乏のために不法に国境を越えざるを得なかった人々に対する不当な扱いに対する抗議活動を行っています。さらに、米国キリスト教

会協議会を通して他の教会と協力し、より公正なアメリカの移民政策と、安全や仕事を求めてアメリカに入国しようとする人々が、そもそも自国から逃げ出したくなるような状況を作り出しているアメリカ経済の役割に対処するために、アメリカの外交政策の転換を要求してきました。19世紀から20世紀にかけて、都市部の会衆派教会は、労働者が組合を結成する権利を擁護する最も強力な味方であり代弁者でもあったのです。今日、アメリカ合同教会は、休業補償の基準額を労働賃金と同等にすることを求める活動に取り組んでいます。更に、1950年代から障がい者の権利のために働いており、当時からポリオを患った人たちのニーズに取り組んだり、生まれながらに病を負った人たちや発達障がいのある人たちの権利を守るために活動したりしてきました。近年では、心の病に苦しむ人々のために、より積極的な提言を行うようになりました。世界的には、世界教会協議会の枠組みの中で、世界中の教会と協力して、様々な人権問題を解決するために活動しています。

環境に関する活動では、まず都市環境に着目してきました。都市部における有毒廃棄物の影響に関する代表的研究は、アメリカ合同教会の『有毒廃棄物と人種』(Toxic Waste and Race)と題するものです。この研究は、貧困に苦しむ人々が住む地域に有毒廃棄物が溢れ、子どもも大人も同様に健康や知的能力に影響を受けているということを初めて記録したものです。その一方で、富裕層が住む地域では、有毒廃棄物の心配をする必要はほとんどありません。アメリカ合同教会の「正義と証しの奉仕部門」(UCC

Justice and Witness Ministries) にとって、貧しい都市部において清潔な水を確保することに対する懸念と同様に、先住民の水利権を保護することが主要な課題となっています。都市環境に対するこれらの取り組みは、19 世紀と 20 世紀の社会福音に根ざしており、労働者とその家族のために、より清潔で安全な都市環境を提供しようとする努力に由来するものです。

アメリカ合同教会でより論争を呼んでいるのは、神学的・預言的な観点から地球温暖化と世界の化石燃料経済に対処しようとする近年の取り組みについてです。ここで明らかに言えることは、教会のすべての人々が、化石燃料からより多くの燃料を必要とする地球規模の経済構造にどれほど巻き込まれているのかということです。この問題は、今後数年間、教会の最大の課題となる可能性が高いでしょう。会衆主義の教会政治形態をとる教会は、地域的な問題には迅速に対応できます。しかし、このように地球上の人々の間でより大きな契約を必要とする大きな問題については、解決するのがより一層難しくなるでしょう。

Congregationalism, the UCC – US and Social Justice Work

Randi Walker
Professor Emerita
Pacific School of Religion

Definitions of congregational/congregationalism and Congregational Churches

- Definition of congregational as a type of church polity
 - Image of the early churches in New Testament times
 - Radical/Anabaptist Reformation understanding of the congregation as the church
- Definition of congregationalism or congregational churches
 - Denominations with congregational polities
 - Baptist churches, Quaker Church or Society of Friends, Unitarian Universalist churches
- Definition of the Congregational Churches as distinct denominations
 - The General Council of Congregational Churches
 - Fragmentation of the Congregational Churches in the middle 20th century

Congregationalism in the US context

The importance of Puritan/congregational churches in the national mythology of the United States

Mayflower Compact and self governance – Constitution and Independence

The Pilgrim's Thanksgiving Story (Myth and Reality)

Government as a creation of the people

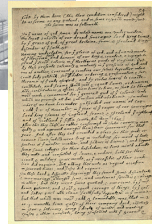
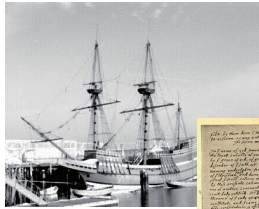
Congregationalism and American sense of identity

Independence

Individualism

Local determination

Congregational Churches as American Churches



Congregational Churches Related to the UCC-US

- The Three congregational denominations within the UCC –US united in the 1930s as the General Council of Congregational Christian Churches
 - The General Council of Congregational Churches
 - The General Christian Convention
 - The Afro-Christian Convention
- UCC –US formed in 1957 with union of the Evangelical and Reformed Church and the Congregational Christian Churches
 - Evangelical and Reformed denomination had a presbyterian polity – local churches were not independent. The General Synod decided on the union.
 - The Congregational Christian Churches decided congregation by congregation whether to join the union.

A Brief History of the UCC

With attention to ecclesiology

- The Four kinds of Churches forming the UCC
- The Evangelical and Reformed Church
 - Lutheran part
 - The Reformed part
- The Congregational Christian Churches
 - The Puritan and Separatist Puritan /Congregational part
 - The Christian Connection Churches
 - The Afro-Christian Connection
- The formation of the UCC in 1957
 - Evangelical and Reformed Church formed in the 1930s
 - Congregational Christian Churches formed in the 1930s
 - Conversation toward union between them began in the 1940s.
- Later ecumenical additions
 - After 1957, some Pentecostal, Baptist, and independent congregations have joined the UCC.
- An Ambiguous Ecclesiology - Trying to bring the whole Reformation together in 1957

Effect of Congregational Churches on the Ecclesiology of the UCC-US

- Constitutional guarantee of local church autonomy
 - Political nature of this guarantee
 - UCC-US holds its churches lightly
 - The informal power of Congregational Conference Superintendents
- Ecclesiology of Covenant
 - Relationship of Covenant to constitution
 - Voluntary Spiritual discipline
 - Growth and Development of covenant and autonomy in the UCC-US

How congregational polity affects social justice work in the church

- Local actions are stronger
 - They can be taken more quickly
 - They rely on local knowledge
 - They can be modified as situations develop
- Denominational or Ecumenical actions allow the denomination to participate in social justice work where not all congregations agree
 - Because the denomination does not need the agreement of all congregations it can work ecumenically while congregations may dissent
 - But the Denomination cannot speak for the congregations – it can only speak to them in a pastoral way
 - The UCC-US position on any issue is not the position of all of the congregations and they may not support it

What the UCC-US has been doing about Human Rights and the Environment

Human Rights Work

Race Relations
Workers Rights
Women's Rights
LGBTQ Rights
Rights of People with Disabilities

Environmental Work

Public Health work in areas of Urban Poverty
– Institutional Churches
1987 Toxic Waste and Race Report
Concern for water rights and water quality in urban areas and indigenous lands
Global Warming and the global fossil fuel based economy



Bibliography: For further information about Congregationalism in the US

- John von Rohr, *The Shaping of American Congregationalism 1620-1957* (Cleveland, OH: The United Church Press, 2009).
- Williston Walker, *The Creeds and Platforms of Congregationalism* (New York: Scribner, 1893) with many reprints, most recently by Pilgrim Press in 1991.
- A. Knighton Stanley, *The Children is Crying: Congregationalism among Black People* (New York: Pilgrim Press, 1978).
- Theodore Trost, *Douglas Horton and the Ecumenical Impulse in American Religion* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2002).

Bibliography: the UCC US, and UCC Human Rights and Environmental work

- David Dunn et. al., *A History of the Evangelical and Reformed Church* (Philadelphia: Christian Education Press, 1961).
- Hanns Peter Keilling, *Die Entstehung der "United Church of Christ (USA): fallstudie einer Kirchenunion unter Berücksichtigung des Problems der Ortsgemeinde* (Berlin: Lettner-Verlag, 1969).
- Barbara Brown Zikmund, Ed. *The Living Theological Heritage of the United Church of Christ* 7 volumes. (Cleveland: Pilgrim Press, 1995-2005) Documentation of UCC engagement with human rights and environmental issues appears in most of these volumes, but especially volumes 5 and 7.
- Randi Walker, *The Evolution of a UCC Style: Essays in the History, Ecclesiology, and Culture of the United Church of Christ* (Cleveland: The United Church Press, 2005).
- Reinhard Groscurth, "Conversion and Identity: The United Churches: Origins, Progress, Relationships," *Ecumenical Review* (October 1995) pp. 440-450.
- UCC Justice and Witness Ministries, "A Movement is Born: Environmental Justice and the UCC," https://www.ucc.org/what-we-do/justice-local-church-ministries/justice/faithful-action-ministries/environmental-justice/a_movement_is_born_environmental_justice_and_the_ucc/ Last accessed 10/31/2022.
- Information about UCC US Human Rights work. https://www.globallministries.org/get_involved/justice_and_advocacy